三島市

（通巻第12号）

郷土館だより

Vol. Ⅳ No.3

1982. 4. 1

子守り（三四呂人形　野口三四郎 作）

目次

史跡を訪ねて……1・2

伊豆佐野の山の神祭り……3・4

行事報告……5

収集資料紹介……6

展示品見学の手引・おしらせ……7

史跡を訪ねて
『伊豆国分寺塔址』

伊豆国分寺跡礎石

当市の長い歴史の一頁として――奈良時代、国府がおかれ、仏教が警異的な隆盛をした。この宗教と政治を合致させた成果、象徴するものとして、国分寺、国分尼寺が建立されました。

自然的環境条件や豊かな歴史に恵まれました三島市には、多くの文化遺産（史跡等）が、残されております。そのうちより、伊豆国分寺塔址を皆様と探訪してみたいと思います。

伊豆国分寺七重塔址は、伊豆箱根鉄道広小路駅より西北約100ｍの伊豆国分寺（以前「蓮行寺」と言った。）本堂裏手に、８個の大きな礎石として残されています。

国分寺とは、天平13年（ 741年）聖武天皇の発願（はつがん）によって、造営されましたもので、国分尼寺を併せると全国に60余ヵ所もあり、奈良時代〝仏教文化〟がいかに隆盛であったかを物語る存在（建築物）であります。

しかし、往時の偉容を偲ぶことのでききる遺跡が現存している所はまったく少く、伊豆国分寺においても、建築物の一端も残されておらず、昭和31年三島市誌編さん委員による発堀調査により、その実態があきらかにされたものです。

【建立年、建立位置】

伊豆国分寺は、奈良時代の何時頃建立されましたものか？何の記録も、伝える所もなくて不明であります。ただ、聖武天皇が総国分寺（全国国分寺の本山）といえる〝東大寺〟を建立後、諸国に国分寺を創設する発願を起し、この詔勅が出されてから、30年以内の宝亀元年（ 770年）までには、全国の国分寺建立が完了されました。

（伊豆国分寺は、建立詔勅より遅くとも20年以内に建立されたものと言われています。）

伊豆国分寺が建立されていた位置について、前記の発堀調査が行われる以前は、諸種の異説が伝えられていて、その位置が決定されていませんでした。

この諸説のうちには、三嶋大社東側の塔の森一帯という説や、伊豆の国府は奈良時代まで、大仁町田京一帯にあって、当初伊豆国分寺は田京にあったものを、後に三島に移したという説等がありました。

そこで、先の調査委員が、市ヶ原廃寺跡を最初に、次いで田京宗光寺廃寺跡を、そして昭和31年には三島市の六反田、国分町（現在は泉町）の発堀調査を行い、又、数ヵ所の陶瓦窯跡調査を実施されました。

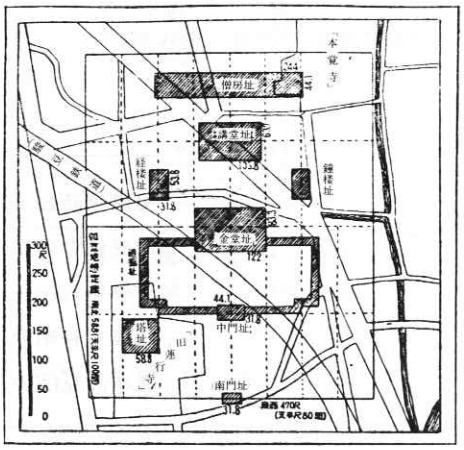
長い年月とあらゆる手段によります調査の結果、伊豆国分寺（昭和30年、〝蓮光寺〟から改称）一帯が、国分寺跡として、決定づけることになりました。

【伽藍配置図、七重塔址】

伊豆国分寺本堂裏手の墓地の中にあります８個の大きな礎石が発見されたところ、この礎石の中心部に柱を建てるための中心礎石を据えた址が判明されました。

この塔址を基準に調査を続けた結果、南北の中軸線上に南門、中門、金堂、講堂、僧坊がならび、講堂と金堂の間には、経蔵と鐘楼が配置され、塔が中門の東西に置かれる国分寺式伽藍配置である事が解明されました。

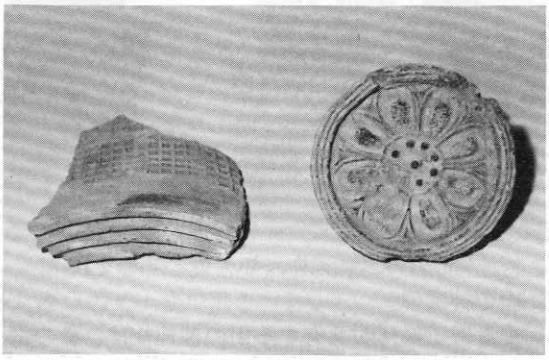
伽藍配置の伊豆国分寺の寺域は二町四方で、東西80間、南北 100間という広大なものであったと、地形上の特質や土堀の古瓦片の出土品により、判断されました。



伊豆国分寺伽藍配置図

発堀されました古瓦は、大別しますと鐙瓦(あぶみがわら)2形式、宇瓦(のきがわら)1形式で、創建瓦は白鳳時代の系図をひく重圏文をめぐらせた単弁蓮花文鐙瓦でありました。

これらの古瓦のほとんどは、焼けた痕跡がはっきりみられますが、これは伊豆国分寺が建立後100年も経たない平安初期に焼失し、その後長い経偉をへてきたものが、この発堀調査によりまして、その辺りの事も明らかになりました。

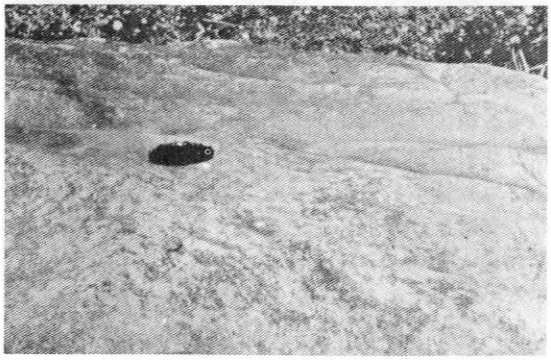


伊豆国分寺瓦『宇瓦』『鐙瓦』

【国の文化財指定】

蓮行寺本堂裏の数個の巨石が順序よく整列している事は古くより注目されており、三島通良氏の「国分寺跡は三島の西方蓮行寺たること動かすべからず。」と強調され、大正10年4月に静岡県告示第1号により史跡に仮指定されました。

その後、蓮行寺住職が、国分寺塔址を、国の文化史跡として指定方の申請をしましたところ、文部技官斉藤忠博士が調査にあたり、伊豆国分寺塔址として認定したので、昭和31年4月に、この塔址のみが史跡指定をうけました。



礎石の枘孔(柱が動かないようにする穴)

【おわりに】

三島市誌の文中より引用させていただき、とりとめなく記しましたが、桜前線もすぐそこまでにせまり、春らんまんの今日此頃、散歩がてら、市郷土館や伊豆国分寺に足を運ばれませんか。

国分寺瓦や七重塔址をご覧になりまして、国分寺域の広大さや、大伽藍配置の立派な建築物等…当時のようすや生活を想像されるのも楽しいものだと思います。

【注釈】

1.伽藍配置

僧寺の基本形式は南から北へ一直線上に南大門、中門、金堂を配し、金堂の左右から中門へ回廊をめぐらした、いわゆる金堂院が伽藍の中心であり、七重塔は金堂院からはずれた東側か、西側が主流であります。

この伽藍配置は東大寺の東西両塔の一方を省略して任意の位置に建てた形といえます。

2.金堂跡

国分寺の中心仏殿で、国々により面積に大小がありまして、間口柱間7間、奥行4間の例が多い。

3.塔趾(址)

方3間で、1辺30尺を越える例が普通で、七重塔の高さは心柱基底経5尺6寸で、この40倍前後といわれるため、200尺（60m）前後の高さ。

4.講堂跡

講堂は経典を講義する場所であり、僧衆が参集する堂でありますから、金堂と同様に間口7間、奥行4間の建築が普通。

5.回廊跡

金堂と中門をつなぐのが普通でありますが、伽藍配置の違いから、講堂と中門をつなぐ例もあります。

6.鐘楼、経蔵跡

時を知らせる鐘楼と経典収納の経蔵は両者同じ大きさの二階造りでありました。

金堂と講堂の中間左右に配するのが普通で、その平面は長方形で南北に長く、柱間は3間に2間が普通。

7.僧坊跡

僧が起臥する長屋形式の建築物で、間口19間奥行3間より、間口9間、奥行3間のものまで各種。

8.南大門跡

伽藍の南ひ開く正門で、5間×2間又は、3間×2間が普通。

（館長　梅田貞治）

伊豆佐野の山の神祭り

場　　所　　三島市伊豆佐野中最寄（藍の沢、田中、中村）

祭礼日程　　1月16日夜　宿でオフルマイ
　　1月17日零時　餅つき、後、神社へ餅のお供え。
　　1月17日朝　餅つき
　　1月20日　　本祭り（大社宮司による祝詞）

伊豆佐野

伊豆佐野は、三島の一番北の村。駿河との境界に位置するところから、区別して伊豆佐野と称しているが、民俗文化圏的には、むしろ裾野市側つまり駿東例に属しているように思われる。十年毎に祭りの村当番が回って来るヨシダサマ(吉田様)の祭礼は、このことの一つの例証と言えるであろう。この祭りは、麦塚、二ッ谷、平松、公文名、久根、深良、神山、石脇、茶畑が、祭当番を交代で受け持っている祭りである。伊豆佐野に祭りらしい祭りといえば、これ以外には山の神祭りがあるだけである。それだけにこの地区の人々の山の神祭りに入れる力は、大きいものがある。

以下に述べる山の神祭りは、伊豆佐野の中最寄の祭りである。箱根山という山懐に抱かれた、いかにも山村らしい祭りである。

ヤッサモチ

「ヤッサモチ」「ヤッサマツリ」と称した方が、一般的には知られているかも知れない。それほどに、伊豆佐野の山の神祭りのなかでは、餅つきだけがクローズアップされてきた。男衆が、「ヤッサ、ヤッサ、ヤッサノヤッサ」と威勢よい掛け声でつく餅つきは、ただそれだけで迫力十分なものがある。十数本の猿すべりの棒杵は、息つく間も与えず臼の中にふりおろされる。その勢いで、臼は踊り出し、動き回る。男衆は、更に勢いづいて臼の周りを回る。餅の手返しは、杵を突き合わせて、餅を空中高く持ちあげて行なわれる。つき手達の「ウォーッ」という叫び声で、舞いあがった餅は屋根の軒先に触れんばかりである。餅つきのハイライトシーンである。

昔は、茅ぶきの軒に餅をつけたり、ツツッカギ（自在鉤）の煤をつけたり、ツバクロ（ツバメ）の巣を餅に混ぜたりもしたそうである。こうして、男衆は十七日の朝の餅つきでも、中最寄中をつき歩いたものだという。

つき上った餅は、まっ黒けである。

このように一風変った餅つきが、威勢のよさゆえに、山の神祭りの中心的行事となっていったことは当然のことだったろう。しかし、この餅つきも、村の素朴な山の神信仰の一つであることを見のがしてはならないであろう。

『ヤッサ、ヤッサ、ヤッサノヤッサ』

山の神信仰

中最寄三部落が共有する山の神神社は、藍の沢に鎮座している。小高い丘陵上の社には、部落を突っ切る道から階段で上るようになっている。

言い伝えでは、この神社は、元は部落の鈴木さんというお宅の個有の山の神だったという。それが、明治のいつ頃か、村に悪病が流行した時があり、それ以来この山の神様を村共同でお祀りするようになった。鈴木さん宅では、当時、山の神様の地所と祠を、村へ一銭五厘で譲ったということである。やはり明治のいつ頃か、病気も治まったので、村では一時祭りを止めたことがあった。ところが再び病気が流行し始めたため、その後は現在まで、村の山の神様としてお祀りし続けているということである。中最寄の山の神様は、つまり村内安全、悪病払いの神であると言えるだろう。

現在山の神の祭礼日は、正しくは正月二十日である。全国平均的には正月十七日という所が多い。伊豆佐野の場合、十七日は餅つきだけである。このような変則的な日程になったことにも由来がある。昔はここでも十七日が祭礼日だった。ある時元の地主の鈴木さん宅で、祭礼日の十七日早朝に不幸が起ってしまった。そこで、その日は餅つきだけにして、本祭りは二十日に延期したのが始まりだった。昭和二十七～八年頃までは、正月二十日、九月十七日の春秋二回であって、秋には境内で相撲なども行なっていたが、後秋は中止し、現在に至っているということである。

オフルマイ

オフルマイ（お振舞い）、ヒトヨセ（人寄せ）と称して、何かの行事の度に宴を張ることが多い。山の神祭りでも、オフルマイは、講仲間達の最大の楽しみであり、一大行事となっている。ヤド（宿）と呼ばれる祭当番の家では、十六日の夜にオフルマイを催す。座敷を開放し、たくさんの料理を用意し振舞う。オフルマイは、十七日早朝一番（午前零時）に始まる餅つきの直前まで続く。男衆はオフルマイの酒に顔を赤らめながら、酒の勢いも手伝ってヤッサモチにかかるのである。昔からオフルマイにつきものの料理は、オザクであった。ニンジン、ゴボウ、サトイモ、コンニャクなどをごった煮したものだ。山の神祭りのオフルマイには、これと甘酒、油揚げのオジヤが決って出たという。

宿はこうしたオフルマイの用意をしなければならないので大変である。しかし、四十三軒の講仲間が年一回催すことでもあり、宿にあたった家では、むしろ張り切って仕度をする。その家の当主にとっては、一代に一度限りの祭り当番になるであろうからだ。

オフルマイ

男衆の祭り

山の神祭りは、男衆の手で行なうのが習わしである。各戸から五合づつ集めた餅米をとぐこと、ふかすこと、つくこと、つきあがった餅をとること、山の神にお供えに行くこと、すべて男衆の役割である。女衆のやることと言えば、オフルマイの接待ぐらいのものであろう。もっとも気勢のあがる餅つきの頃ともなれば、「ヤッサ、ヤッサ」の掛け声とともに、男衆の間からはポンポンと威勢のよい会話がとび出す。周りで笑いころげて眺めるのは女衆の仕事である。つきあがったモチは、お供え用に丸められ、男衆の手で山の神神社まで運ばれる。神社で一同礼拝の後、餅は鎌で切って供えられる。暗闇の中に、つい先ほどまでの「ヤッサ」の声が、吸いこまれてしまったような静けさの中である。

深夜の山の神様で共同祈願

クラブと若い衆

昔の餅つきは、若い衆の役割だった。クラブ（若い衆宿）に待機していた若い衆達に、宿から「餅つきを頼むぞ」と声がかかり、そこで若い衆は出かけて行ってついたものだという。

十数年前頃から、伊豆佐野の若者もすっかり減ってしまった。そのため、今では各家の戸主達が餅つきをやるようになっている。

クラブは、かつての、村の若者達のコミュニケーションの場であった。伊豆佐野では、若い衆宿と言うよりは、クラブと言った方が判り易い。かなり早くから馴じみの言葉となっていたようだ。クラブには、村の子供が学校を卒業すると自然に入るようになっていた。集会の施設を共有し、雨降りの日、あるいは普段の日でも、そこに集い泊ったりもした。先輩、後輩の階級ははっきりとあり、交わされる種々の会話、村仕事等の中から、学ぶことの多い場であったといわれる。俳句などをよんだりの教養も、クラブで習うことだった。

今回の山の神祭りの宿になった二宮家の正蔵さん（69才）は、昔を懐しむように「クラブでは悪いこともやったが、良かったことが多かった」と語ってくれた。

（学芸員　杉村　斉）

■行事報告■

少年教室『初午幟作り』講習会

昔からの年中行事のひとつとして、初午の日に稲荷社を祀る行事があります。稲荷を屋敷神として祀る例は、静岡県では中部以東に多く、初午の稲荷祭もそうした地域に多くみられます。三島では市内各所の稲荷社に赤一色、あるいは四色（赤、紫、緑、黄）の幟りが立てられ、お祭りが行なわれます。20年位前までは子供達は、自宅に稲荷社が祀られていなくても幟りを作り、近所の稲荷社に幟りを奉納する事が普通でした。子供達が持ち寄った幟りは稲荷社の前に立てられ、駄賃として稲荷社のある家から菓子や果物が与えられました。子供にとっては駄賃をもらう事が大きな楽しみであると同時に、これが子供にとっての初午の日の行事でもあったのです。現在では残念な事に子供達のこのような行事はまったく消滅してしまったようです。郷土館では消えゆく子供の年中行事を考える事と伝承を願い、毎年初午幟作りの講習会を開いています。今年は市内の小学六年生18名の参加を得て１月31日(日)に開催しました。

少年教室『ふるさと探訪』

近年中学生の非行が社会問題化していますが、郷土館でも問題の解決に少しでも役立ちたいと考えています。　学校教育とは異なる社会教育の立場から中学生との接触の機会を求め、中学生少年教室を開催しました。

本講座では三島市近郊にある中世の史跡を見学しました。参加者は中学１、２年生23名。市役所のマイクロバスに乗って、市立中郷小教諭小泉安三先生を講師に回りました。

見学概要

①毘沙門堂　韮山町奈古谷にある国清寺（延文５年、畠山国清が建立し、自分の名をとって国清寺としました。後上杉憲顕が増築し、足利義満のとき関東十刹の一に加えられました。）の守護神の毘沙門天を祀ったのが毘沙門堂で、この附近が文覚上人の流寓跡といわれています。

山門の金剛力士像は鎌倉時代運慶の修飾と伝えられて、ＮＨＫ大河ドラマのテーマ映像のバックとしても使用されました。

②山木判官平兼隆館跡　兼隆は平安時代の末より勢力のあった和泉守信兼の子で、はじめ京にあって検非違使の尉でありましたが、父の怒りにふれて伊豆に封ぜられて山木郷に居住しました。平家の一門でありましたので勢力もあり伊豆の国守の目代となりました。その館跡ははっきりと定める事はできませんが、現在柏木邸の庭西端に礎石をもって兼隆館跡と該して大よその位置としています。

③蛭ヶ小島　頼朝が永暦元年３月に流された所でありますが、この地は現在の韮山町の地名であったようです。当時狩野川の分流がそのあたりに大きな中洲をつくっていたため、蛭ヶ島という地名が生まれ、それが不正確なままに中央の人々に伝えられ、頼朝配流の地と意識されたのでありましょう。

⑤頼家の墓、範頼の墓　頼家の墓は修善寺町温泉場の奥、指月殿の左傍にある五輪です。現在の墓碑は後年建てられたもので、その後に五輪があります。範頼の墓は修善寺町小山にあり、墓地入口の路傍に「蒲冠者源範頼公墓道」と書かれた石柱が立っています。

⑥山中城　天正18年３月29日、秀吉の大軍に攻め滅ぼされた北条方の箱根山中の城がこの山中城です。小田原攻めの緒戦として、また中世の山城として、歴史上あるいは城郭研究からその存在が注目されています。現在三島市ではここを史跡山中城公園として復元整備して、一般に公開しています。

感　想

参加生徒とはわずか一日のふれ合いでしかなかったが、所期の目的を多少なりとも達成できたと考えています。

小泉先生の説明を聞く受講生（山中城跡公園にて）

■収集資料紹介■（昭和56年11月～）

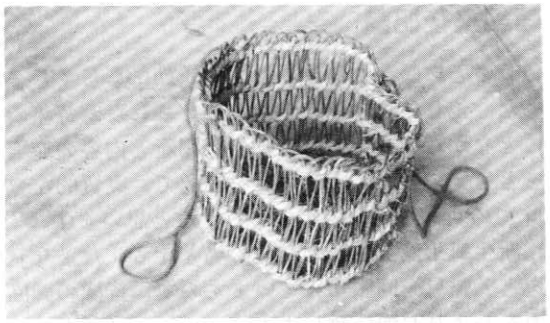
採集日	提供者	住所	資料	点数
56.11.14	望月 政敏 氏	市内大場赤王919－1	カツギダワラ	1対
〃	中野藤吾氏	立川市栄町3－17	書籍「静岡県に於ける郷土の科学者」	1
56.12. 1	山本 明氏	市内大社町1－33	（大正時代のおもちゃ等） でんでん太鼓、鯛つり、貯金箱、 トランク持ち人形、オトギオリホン、 メンコ、小物袋、羽子板、輪投げ、 水鉄砲、和舟、その外	94件
〃	花島信之氏	市内若松町4613	（教科書） 普通小学画学楷梯、日本国尽、 小学科用衛生大要、修身児訓、 小学高等科習字本、唐詩選、小学歴史、 高等小学読本、小学日本史略、外19冊	28
〃	〃	〃	金線牌煉乳ラベル	4
57. 1. 6	鈴木島太郎氏	市内寿町3－3	火鉢	1
57. 3. 8	町田喜代蔵氏	市内大社町5－48	（教科書） 小学内国地誌、高等小学読本、 尋常小学修身書、	9
〃	〃	〃	書籍「真書太閤記」	3

藤の民具

山野に自生し、五月頃になると紫色の花をつける藤は、その繊維やつるの性質を利用して、しばしば民具の材料とされた。大井川や安倍川の奥の山村では、明治の頃まで藤の繊維を取り出し、糸を作り、機（はた）にかけて布を織っていた。出来た製品はタフなどと呼ばれ、藤機（ふじばた）のことはフンダコなどと呼んでいたようだ。三島周辺の山地でも、藤の自生が見られるので、こうした藤布は無いものかと前から探していたが見当らなかった。

市内赤王（あこう）の望月政敏さん宅に寄った時、赤王では藤のつるを使って担ぎ俵（かつだわら）を作るということを聞いた。興味を示すと、望月さんはさっそく一対の、新品のを編んで下さった。（写真）藤で編んだ担ぎ俵は、水気を吸わず軽く、イモなどのデロモン（泥のついた根物）などの運搬には、泥の通りがよく便利であるという。

製作者も少なく、材料も少なくなっているので、貴重な民具であると思う。



藤の担ぎ俵

資料紹介（館蔵品）

■展示品見学の手引■（三島だるま）

「だるま」は漢字で「達磨」と書かれるが、これは緋の袈裟をまとった、達磨大師の坐禅姿を型どったところから出た呼び名である。

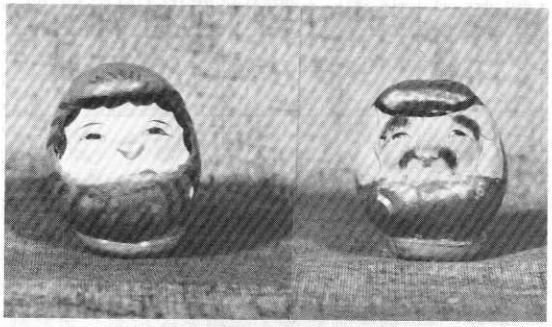
江戸時代以降、「赤もの」といわれた赤い彩色が、子供の疱瘡（ホーソー）除けのマジナイとして信じられ、また「起き上がる」、「七転八起」というところから、商売繁盛の縁起物として各所にだるま市がたったという。

達磨大師とお茶とは密接な係わり合いがあるがそれは大師が九年面壁の修行中に、眠くて垂れ下がってくる「マブタ」を切り取ったところ、そこから生えたのが茶の芽であり、ここに初めて茶の木がこの世に発生したという伝説からくるものである。なお茶道も、禅宗がその思想的背景となっており禅宗と茶道と、達磨、という関係をもって全国的に広まったものといわれている。

静岡県は茶の生産県であり、また茶道の盛んな所であるだけに、だるま信仰の盛んな理由ともなり、全国的にも群馬県に次ぐだるまの生産がある。

ここに紹介する「三島だるま」は歴史も浅く、これについて知っている人も少ない。

作者の故福田高雄氏は、若い時に静岡市のだるま屋で修業を積んだ人で、三島で「三島夫婦だるま」を作り出した。この男女一組のだるまは県内では珍しいものである。 三嶋大社の「起き上がりエビス」も福田氏によるものである。ユーモラスであたたかい良いだるまであったが、41年に亡くなられて以来、後継者も無く絶えているのはさびしい。（内容一部「ふるさと百話」より引用）



三島夫婦だるま（郷土館２階展示場）

★★★★★★★ おしらせ ★★★★★★★

■郷土館の行事予定■

○春の映画教室

上映日	上映映画（午前）	上映映画（午後）
4月1日 2日 3日	走れメロス(20分) 東海道五十三次 (30分)	ごんぎつね(21分) 手づくりの生きがい(28分)
4日 6日	しあわせの王子 (18分) 箱根の自然と歴史	火事と子馬(22分) 幼児のあそび－今と昔－(20分)

（註）5日(月)は休館日ですので、映画教室は開催しません。

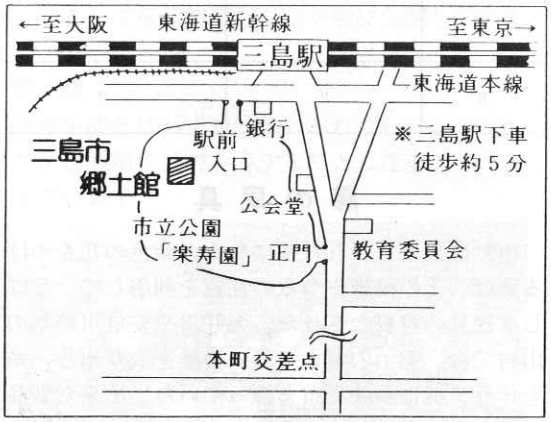
■編集後記■

日ごとに暖かく過ごしやすい季節になってきました。忙しい思いで新年度を迎えましたが毎年のことながら、今年こそは紙面の刷新と内容の充実をと考えています。新館長を迎えて、実質的な意味での新しい出発の年であろうかと思います。

新生郷土館と市民の交流の場となる「たより」をと、職員一同張切っていますので、皆様の御協力を心よりお願い致します。 （稲木）

利用案内

休館日　毎月第1月曜・12月27日～1月2日
開館時間　午前9時～午後4時30分
入場無料　（但し、楽寿園入園の際、有料）



郷土館だより No.12
昭和57年4月1日発行
（年3回発行）
編集　三島市 郷土館
住所 〒411　三島市一番町19－3
TEL 0559－71－8228
発行　三島市教育委員会